ロコモティブシンドローム

ロコモティブシンドロームの概念・現状と将来展望

国立障害者リハビリテーションセンター*，東京大学** 中村 耕三
東京大学医学部附属病院22世紀医療センターロコモ予防学講座 吉村 典子
東京大学整形外科学教室 田中 栄

KEY WORDS
●歩行
●運動器
●未病
●超高齢社会

Locomotive syndrome: Concept, status and future.

Kozo Nakamura
(顧問*，名誉教授**)
Noriko Yoshimura(特任教授)
Sakae Tanaka(教授)

Ⅰ．概　念

ロコモティブシンドローム(以下，ロコモ)は，運動器の障害によって「立つ」，「歩く」という移動機能が低下した状態をいう。2007年，日本整形外科学会から提唱された，未病の状態を含む広い概念で，人の移動障害の原因，症状，評価法，対処法を提案したものである(図１)[1]。

わが国は現在，超高齢社会を迎え，すでに人生100年時代が視野に入っている。人生100年時代では大部分の人が人生の後半に運動器の不調による移動機能の低下を経験する。このことは，高齢になった人の移動機能低下への対策の重要性を示すと同時に，小児期を含む人生のさまざまなステージで，運動器の健康を保てるよう，これまでにない新たな工夫が必要になったことを示している。

ロコモは，国の健康増進の基本方針である健康日本21(第２次)(平成25年～34年)の具体的な目標の１つとしてその認知度向上が掲げられている[2]。長寿社会を迎えたわが国における喫緊の課題の１つである。

Ⅱ．現　状

１．運動器疾患の現状

運動器疾患は，変形性脊椎症など椎間板変性疾患，関節軟骨変性による変形性関節症，骨粗鬆症といった変性疾患が多い。変性疾患は一般に慢性に経過するが，進行すると手術治療が必要となる。手術を必要とする状況は，運動器にとって１つのイベントとみることができる。

整形外科入院手術と年齢の関係をみると，手術件数は10歳代に１つのピークがある。この年齢は骨折を中心とし

SAMPLE
Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.